国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第34号 (2008年1月1日発行)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001927

国語研の窓 34号

平成20年１月１日　第34号　発行　独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集　国立国語研究所管理部総務課
普及広報担当グループ
〒190-8561 東京都立川市緑町10-2
電話　042-540-4300　FAX　042-540-4334
URL　http://www.kokken.go.jp/



「就学前児童の語彙力調査」で使用したおもちゃ

もくじ

暮らしに生きることば　1
解説：医療コミュニケーションの研究　2
お知らせ：第１回「病院の言葉」委員会を開催しました　3
在外研究報告：コロンビア大学での研究を終えて　4
第32回，33回「ことば」フォーラム報告　5
刊行物紹介：『国語年鑑2007年版』
『日本語教育年鑑2007年版』　6
文字さんぽ　7
表紙のことば　7
お知らせ：公開研究発表会　8
新刊　8

暮らしに生きることば

身に覚えがないことは「～していません」

「昨日の試合見た？」と聞かれたらあなたは何と答えますか。「いや，見ませんでした」とも「いや，見てません」とも答えることができます。「～しましたか？」には，「～しませんでした」とも「～していません」とも答えることができます。しかし，いつもどちらも答えることができるわけではありません。

よく刑事ドラマなどで「お前がやったんだろ！」のような尋問シーンがありますが，その返答は必ず「やってません！」であり，「やりませんでした！」とは言いません。「やりませんでした」と言うと，その場にいたが自分はやらなかったか，もっと言えばやるつもりだったがやらなかったというニュアンスになってしまいます。身に覚えがないことには「～していません」としか言えません。痴漢冤罪を扱った「それでもボクはやってない」という映画がありましたが，この題名が「それでもボクはやらなかった」だと日本語としては正しくても，何だか違和感があるのも同じ理由からです。

ところで，外国人に対する日本語教育では，「お昼食べましたか？」のような質問に「いいえ」と答えるとき，「食べませんでした」と「食べてません」と答えが分かれることをよく取り上げます。「食べませんでした」の場合，夕方くらいには「(今日は忙しかったので）食べませんでした」と答え，「食べてません」の場合，お昼過ぎくらいには「(今の時点では）食べてません（が，後で食べるかも)」と答えるという説明です。もちろん，この「まだ～していません」という用法も大切なのですが，実際の会話場面では身に覚えがない場合の「～していません」という用法もよく使われます。

最初の「昨日の試合見た？」にもう一度戻ってみましょう。野球好きの人なら，昨日，大変盛り上がった試合があったことは知っているので，「いやー，見ませんでした」などと言います。しかし，野球に大して興味がない人は，何の試合のことやらわからないので，「…いや，見てませんね」としか答えようがないことでしょう。

（森 篤嗣）

解　説

医療コミュニケーションの研究

研究の目的

この研究は，医療の専門家と非専門家である患者・家族のコミュニケーションに関わる言語問題を社会言語学的調査に基づいて解明し，問題の解決・改善策を提案することを目的としています。

今，医師をはじめ，医療従事者・医学研究者の方々と連携協力して調査研究を進めています。

医療コミュニケーションの適切化という課題

近年，医学・医療の目覚しい進歩に伴い，この分野の情報は急速に増加し，非専門家にとって難解な外来語，アルファベット略語，漢語の専門用語が数多く登場しています。

また，医療現場では，患者中心の医療の実践が求められ，情報の共有による患者参加型の意思決定や，患者・家族と医療従事者との協力関係の構築を重視する改革が始まっています。

安全で信頼される，患者満足度の高い医療を，という社会的要請に応えるためにも，医療の専門家と非専門家のコミュニケーションの適切化を図ることは重要な課題です。

これまで実施した国民対象の世論調査や，医療現場の調査によって，大きく分ければ，次の二つの課題があることが分かりました。

①患者・家族と医療従事者の信頼関係・協力関係を築くコミュニケーションの工夫。

②患者・家族と医療従事者の情報の共有，合意の形成に役立つ，難解な専門用語の分かりやすい伝え方の工夫。

ここでは，①の課題の調査研究の成果，特に，効果的なポライトネス・ストラテジーを紹介します。

②の課題は，「病院の言葉」委員会が「病院の言葉を分かりやすくする提案」で遂行していきます。

良好な関係を築くコミュニケーションの工夫

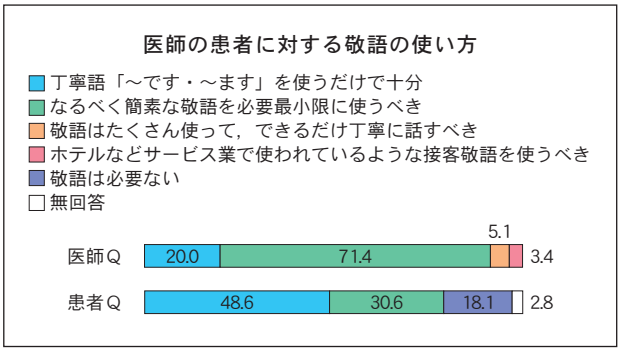
患者・家族と医療従事者がラポール（共感を伴う信頼）に基づく協力関係を築き，闘病の同志として対処行動に踏み出すには，ポライトネス・ストラテジー（調和のとれた人間関係を築き，維持するために行う，相手に配慮した言語行動）を効果的に使う必要があります。

方言を使うポライトネス・ストラテジー

医師を対象に，診療時に方言を使う効果を調査しました。その結果，患者‐医師間の心理的距離を近づけ，ラポールに基づく協力関係の構築に役立つポジティブ・ポライトネス効果があることが分かりました。また，患者から有用な医療情報を円滑に引き出せるという利点があることも分かりました。

簡素な敬語を使うポライトネス・ストラテジー

敬語を使って相手に敬意を表すのは，礼儀正しく接することで相手の立場を侵さないように，心理的距離を保つ働きかけで，ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーに分類できます。患者・医師双方を対象に，患者に対する敬語の使い方について，どう考えるか調査しました。その結果を図に示します。



医師の側は，なるべく簡素な敬語を必要最小限に使うべきだと考える人が圧倒的多数です。患者の側はさらに簡素な敬語を期待していて，丁寧語「～です・～ます」だけで十分だという人が約半数です。

かしこまらない簡素な敬語を使うのは，より気さくに接することでもあります。お互いの心理的距離が縮まり，ポジティブ・ポライトネス効果も生みます。ラポールに基づく良好な患者‐医師関係，闘病の同志というべき協力関係を築くのに有効です。

効果的なポライトネス・ストラテジー

このほかにも，次のようなポライトネス・ストラテジーが効果的であることが分かりました。☆患者の望みに耳を傾ける。☆患者の努力をほめる。☆患者を医療チームの一員に加える。☆不安でいっぱいの患者に楽観的に言う。☆患者に有益な情報をメモやパンフレットで渡す。☆患者の協力に感謝する。☆患者に精神的苦痛を与えないようにやわらげて言う。☆患者に苦痛を与えざるを得ないことを詫びる。

今後もさらに，調査研究に基づいて，医療コミュニケーション適切化の具体策を検討し，その成果を医療現場に提供していきます。　　（吉岡 泰夫）

第１回「病院の言葉」委員会を開催しました

国立国語研究所では，昨年度までの約４年間，「外来語」言い換え提案という活動を行ってきました。これは，役所やマスコミが発信する情報の中に外来語が多く，分かりにくくて困るという国民の声を受けて，外来語を分かりやすく言い換えたり説明を付けたりする工夫を，提案したものです。

しかし，国民にとって分かりにくいのは，外来語だけではありません。国立国語研究所が行った調査では，医療や介護福祉の言葉について，分かりやすい言い換えや説明を望む声が，とてもたくさんありました。そこで，今年度からは，病院などで使われている，患者にとって分かりにくい言葉について，分かりやすく表現する工夫を検討して，提案する活動に，着手することにしました。

この活動を行うために，言葉の専門家と医療の専門家からなる委員会を，平成19年10月に設立し，第１回の会議を開催しました。平成21年3月に，検討結果を発表する予定です。（田中 牧郎）



国立国語研究所「病院の言葉」委員会 設立趣意書

独立行政法人国立国語研究所
平成19年10月15日

〇患者が自らの医療を選ぶ時代

現代の社会では，個人の価値観が尊重され，国民一人一人が生活に必要な情報を自ら集め，理解し，判断することが重要になってきています。これまでは，専門家の判断に任せがちであった事柄についても，自らの責任において決定することが求められる社会に変わってきています。とりわけ，病院・診療所で診療を受ける場合には，患者が病状や治療について医師や看護師など医療従事者から十分な説明を受け，理解し，納得したうえで自らにふさわしい医療を選択することが大切です。

〇患者には病院の言葉は分かりにくい

ところが，病院や診療所に足を運んだ患者は，医療従事者の話す言葉の内容や，ポスターやパンフレットなどに書かれた事柄を十分に理解できないことが，しばしばあります。そこには，病気になったりけがをしたりする前には見聞きすることのなかった，なじみのない分かりにくい言葉がたくさん出てくるからです。国立国語研究所が平成16年に実施した調査では，８割を超える国民が，医師が患者に話す言葉の中に，分かりやすく言い換えたり，説明を加えたりしてほしい言葉があると回答しています。

〇医療従事者は分かりやすい言葉による説明を

このように，医療従事者が使う言葉を患者が理解できない現状では，患者が十分に納得したうえで，自ら受ける医療について決定することは容易でありません。患者が的確な判断をするためには，何よりもまず専門家である医療従事者が，専門家でない患者に対して，分かりやすく伝える工夫をすることが必要です。医療従事者が分かりやすく伝えようと努力することにより，患者の理解しようとする意欲も高まるはずです。医療の安心や安全は，医療従事者と患者との間で情報が共有され，互いの信頼が形成されることによって，初めて達成されるものと考えます。

〇分かりやすい説明の指針

この委員会では，まず，患者がどのような言葉を分かりにくいと感じ，どのような誤解をしているのか，病院・診療所で使われる言葉の問題がどこにあるのかを把握します。そして，それに基づいて，医療従事者が患者に説明する際に，誤解を与えず分かりやすく伝えるには，どのような言葉や表現を選べばよいのか，そのための具体的な工夫について検討し，提案します。この提案が，医療従事者による分かりやすい説明の指針となり，ひいては患者やその家族の的確な理解を助ける手引きとなれば幸いです。

在外研究報告：コロンビア大学での研究を終えて

国立国語研究所には研究員の研究能力等の向上を目的に研究員を外国に派遣する在外研究員という制度があります。私はその制度を利用し，昨年11月から10ヶ月間，コロンビア大学で研究をするという貴重な機会をいただきました。コロンビア大学（1754年創立）はアメリカで6番目に古い私立大学で，キャンパスはニューヨークのマンハッタンにあります。建物はどれも趣きがあり，またロダンの彫刻なども置かれており，NYの観光スポットの一つです。特に写真にある図書館とその前にあるアルマ・マター像（母校の意）は大学の顔と言えるでしょう。





コロンビア大学は歴史のある大学ですが，私は1979年と比較的最近設立されたコンピューターサイエンス学科の，音声言語処理グループに属していました。

グループを統轄するのは Julia Hirschberg 教授です。音声言語処理というのは，例えばコンピューター上で人間の音声を自動で認識したり合成したりする技術のことです。またこれらの技術の応用として，コンピューターと人間が対話をするシステムや，講演や会議などの音声を自動で認識・要約して議事録を作成するシステムなどの開発も盛んです。このような技術を開発するためには，人間の発する音声がどのような性質を持っているのか，人間の会話がどのような構造になっているか，といったことを明らかにする基礎的研究が欠かせません。教授は早くからこの基礎的研究にも関心を寄せ，音声のイントネーションなどについて言語学者との共同研究を積極的に行ってきました。

このような教授のもとで私は，「話者交替」と呼ばれる現象について研究してきました。日常の会話では，誰が，いつ，どのような順番で話をするかは決まっていないにも関わらず，多くの場合，特に大きな混乱もなく話の順番が自然と調整されています。このような現象はみなさんには当り前すぎて，なぜ研究対象とするのか分からないかもしれません。しかしコンピューターと人間が対話するシステムでは，コンピューターは話を適切な位置で開始・終了したり，人間の話の最中に適当に相槌を打つ必要があるわけですが，そのタイミングの見極めがとても難しいのです。そのため，Hirschberg 教授を含め対話システムを開発している研究者は，人間同士がどのように話のタイミングを調整しているのか，そのメカニズムに強い関心を持っており，今回これをテーマに共同研究をしてきたというわけです。

さて，かたい話はこれくらいにして，最後にNYでの生活について少し書くことにします。行ってすぐのころは真面目にもほぼ毎日，朝から晩まで大学で研究をしていました。しかし教授や研究室の大学院生はみな，毎日は来ませんし，来ても夕方5～6時になるとさっさと帰っていきます。私がぐずぐず遅くまで残っていると，「早く帰ってNYの生活を楽しみなさい！」と言われてしまいます。確かにたった10ヶ月の滞在です。心を入れ換え，月に2回は大学の帰りにオペラやクラシックのコンサート，ミュージカルなどに行くように，週末は街や公園を歩き回ったり美術館や博物館などに足を運んだりするように心掛けました。忙しいニューヨーカーですが，お昼になると近くの公園に集ってきて，賑(にぎ)やかに食事をします。一人で本を読んでいても声をかけてくれる人が結構います。また夏にはフリーのイベントが盛り沢山で，プロによるオペラやクラシックのコンサート，ジャズなどを毎日のように公園や広場などで楽しむことができます。このような場所では知らない人同士でもとても盛り上がります。確かに大学では味わえない雰囲気が街には溢(あふ)れていました。教授は研究だけでなくこんなことにも良いアドバイスをしてくれたわけです。

日本に戻ってきて3ヶ月半が経ちました。研究室に閉じ籠っていないでもっと外の世界も楽しむ，これをNYで学んできたはずなのですが，残念ながら学習の効果はあまりなかったようで，元の生活にあっという間に戻ってしまいました。今この原稿を書きNYでの生活を思い出しながら，深く反省をしているところです。

（小磯 花絵）

「ことば」フォーラム報告

今年度の「ことば」フォーラムは「映像作品から話しことばを考える」をテーマに東京と福岡で２回開催しました。

第32回は，6月30日（土）の午後，国立国語研究所（以下国語研）で開催しました。映像作品を広い視野でみて「ことば」を考える特別講演と二つの発表がありました。

品田雄吉氏（映画評論家・多摩美術大学名誉教授）が，『街の灯』（チャップリン），『晩春』（小津安二郎），『わらびのこう　蕨野行』（恩地日出夫），『しやべれどもしゃべれども』（平山秀幸）などの映画作品を取り上げ，日常的な会話，創造した架空の方言，言語と人間関係などの問題に焦点を当てつつ，映像（映画）とことばの関係や，その周辺について触れました。

その後，国語研で制作した「ことばビデオ」シリーズ第５巻『日本語の音声に耳を傾けると…』の上映と，国語研ホームページ上の「紹介用ビデオ」の紹介を行いました。休憩後，このビデオに関連して，「ことばビデオの情報源」というテーマで，尾崎喜光（国立国語研究所）がビデオの制作・普及は，研究成果を国民に分かりやすく伝えるという目的も持って行っていることを説明し，ビデオのもととなった調査データを紹介しました。また，調査方法，音声やアクセントの使い分けに関する調査結果・組み合わせについての興味深い現象について説明しました。また，そこから予想される映画・テレビドラマ・演劇に方言音声を取り入れる際の留意点等についても話しました。

次に，小河原義朗氏（北海道大学留学生センター）が，大学での日本語教育について概観しました。映像を使った日本語教育の現場で，日本語教師は映像をどの程度どのように活用しているのか，学習者は映像をどのように見ているのかについて，国語研究所の「学習環境調査」の事例や自身の現場経験などをもとに考察するとともに，「ことばビデオ」の利用について言及しました。

最後に，直接，会場からの質問を受け「読み解く力」や「表現意図」をキーワードにディスカッションを行いました。

第33回は，11月２日（金）午後，アクロス福岡（福岡市中央区天神）で開催しました。当日は，所長あいさつ，趣旨説明の後，三つの発表とディスカッションがありました。

中神智文氏（福岡県立朝倉高等学校）が「国語教育の現場での活用を考える」というテーマで，自身の高校での小説教材の活用に触れ，「ことばビデオ」第５巻の活用や朗読テープ聞き分けの授業風景，こうした活動後の生徒の感想を紹介しました。



次に，清ルミ氏（常葉学園大学）が，日本語教育の現場（外国人対象，日本人学生対象，日本語教師養成課程・受講者対象）を概観した後，各対象に対する自身の教育実践を紹介しました。言語表現（「NHK新にほんごでくらそう」），パラ言語＝副言語（「ことばビデオ」第５巻第１話「気持ちや意図を伝える音声」），非言語（映画２本）に着目し，コミュニケーションの実態と映像の関係について言及しました。

３人目に，杉戸清樹（国立国語研究所長）が，映像はどんなものごとを伝えるのか？について言及しました。具体的には，映像作品の可能性に焦点を当て，「言葉を用いたコミュニケーションで，言葉以外のものごとも，多く伝えていること」「そのことにあらためて気が付き，考えるきっかけを映像が与えてくれること」を提示しました。

休憩後，質疑応答，ディスカッションがあり，副言語（声の調子，イントネーション等），非言語（身体動作，距離等）を含むコミュニケーションの重要性を再認識しました。映像作品を広範な現場で活用していくためには，今後，Viewing（見ること）という学習・指導の領域・科目に注目することや作品内容，活用・入手方法の周知，広報の工夫の充実を図ることなどが肝要であることが確認されました。

（野山 広）

刊行物紹介

『国語年鑑2007年版』



昭和29（1954）年の創刊以来，半世紀以上にわたって，日本語の研究情報に関する基礎的な文献として重用されてきた『国語年鑑』の2007年版を，このほど刊行しました。

○第１部「動向」…第２部の文献目録，及び本研究所の「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」を資料として，分析を行いました。「刊行図書の動向」「雑誌文献の動向」では過去10年間の文献データ，「総合雑誌記事の動向」「新聞記事の動向」では過去５年間の記事データに基づき，分野別の全体比の推移に注目し，動向の概観と変化の傾向の分析を行っています。

○第２部「文献」…2006年中に発表されたものを中心として，刊行図書や，学術雑誌に掲載の文献，そして総合月刊誌の特集・連載・対談のうち，日本語に関するものの目録をまとめました。図書（約1,400件）と雑誌文献（約4,000件）については，利用しやすいよう分野別に掲げています。加えて，図書・雑誌・総合月刊誌の発行所のデータも掲載しました。

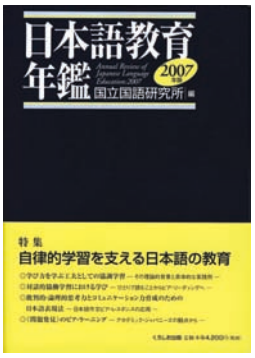
○第３部「名簿」…日本語にかかわりの深い個人や学会・団体等の情報を掲載しています。

○索引…第２部のうち「刊行図書一覧」「雑誌文献一覧」についての著者名索引です。

○付録CD-ROM…第２部のうち「刊行図書一覧」「雑誌文献一覧」のデータを，PDFファイルとテキストファイルの２種類の形式で収めました。

＊御購入に関するお問い合わせ先：大日本図書（03-5940-8679）
＊『国語年鑑』ホームページ： http://www.kokken.go.jp/kanko/kokugo_nenkan/

『日本語教育年鑑2007年版』



『日本語教育年鑑』は，国内外の日本語教育の現況や日本語教育研究の動向についての情報を提供し，情報交流の基盤となることを目指して2000年から作成しています。2007年版は10月に刊行されました。

○第１章　特集「自律的学習を支える日本語の教育」

日本語教育の分野でも近年見られるようになって来た協働学習活動に注目し，自律的に学ぶということ，協働・協調して学ぶということはどういうことなのか，どのようにしたら自律的な学びができるのかを問いかけながら，具体的な実践例や考察の結果を提示しています。

○第２章「日本語教育の動向（2006年度）」

例年通り日本語教育関係機関・団体・省庁の年度活動報告を掲載しています。また，本号では，特別寄稿として「文化庁文化部国語課日本語教育実態調査」を取り上げました。1967年に文部省文化局が行った第１回調査から平成17（2005）年度調査までの約40年の結果が通時的に解説されています。

○第３章「資料」

2005年４月から2006年３月の間に発行された日本語教育関係論文の書誌情報と，日本語教育関係の平成18年度文部科学省科学研究費補助金採択課題を掲載しています。これらは，以下のホームページで検索ができます。その他各種情報の入手先についても掲載しています。

＊御購入に関するお問い合わせ先：くろしお出版（03-5684-3389）
＊『日本語教育年鑑』ホームページ：http://www.kokken.go.jp/nshiryou/

文字さんぽ

きき酒

12月は忘年会，クリスマス，年が明けるとお正月，新年会。とかく年末年始はお酒を飲む機会が増えます。ビール，焼酎，ワイン，ウィスキー，日本酒など，お酒の種類もさまざまです。お酒に合った食事，食事に合ったお酒を選ぶことも，楽しい食事のひとときを過ごしたり，健康と体調を気遣ったりするためには大切なことです。

ワイン選びならばソムリエに相談すればよいのですが，日本酒のことは誰にきけばよいのでしょうか。酒屋のおやじか，酒蔵の杜氏(とうじ)か，それとも，酒場の飲兵衛か。最近は，「唎酒師（ききざけし）」という日本酒専門のアドバイザーがいます。

「唎酒師」は，日本酒サービス研究会・酒匠研究会連合会が認定する資格で，1991年から始まっています。国語辞典で「ききざけ」をひくと，「聞酒」あるいは「利酒」と漢字表記が見られますが，この資格では「利」に口偏のつく文字を使っています。主催団体によると，「口をつかって，飲んで判断してもらいたい」という意図を込めて，「唎」の字を用いているとのことです。

資格の名称表記が「唎酒師」となったこともあって，日本酒サービス研究会・酒匠研究会連合会のWebページはもちろん，新聞，書籍，ポスターなどでも「唎」の字を見かけるようになりました。左の写真は酒販店のポスターの一部です。右の写真は飲食店の箸袋の一部です。また，『唎酒師葉石かおりの隠れ酒がうまい！』（講談社刊，2004年）のように，「唎」の字は書名にも登場します。



2006年９月東京都立川市内で撮影



2006年３月
東京都中央区で採取

さて，北原白秋の第二詩集『思ひ出』（明治44〔1911〕年刊）に，「酒の黴(かび)」と題する詩が収録されています。その一節に，

さかづきあまたならべて
いづれをそれと嘆かむ，
唎酒（ききざけ）すなるこころの，
せんなわれも酔ひぬる。

とあって，ここで「唎酒」が使われています。北原白秋は酒造を生業とする商家の出です。「唎」の字は，酒造業界で使われ続けてきた文字なのでしょう。口に含んで酒の味を吟味する，その情景が浮かんできそうな文字です。

（高田 智和）

表紙のことば

表紙の写真は，幼児が小学校入学までにどれだけの文字力・語彙(ごい)力・文法能力・コミュニケーション能力などを習得するかを，全国的な視野でとらえようと行なった「就学前児童の言語能力に関する全国調査」（昭和42～44年度）で使われた実験用具の一部です。こうした実験用具を「刺激材料」と呼びます。

２台の自動車を使った実験では，向きを変えながら位置関係を変化させ，＜前・後ろ＞という空間を示すことばの理解を確かめました。ホース・リボン・手帳・ブロックを使った実験では，「長くて太いホース」「厚くて大きい手帳」「長くて広いリボン」などのように，物の性質と状態を表すことばを幼児が正しく理解して使うことができるかを調べました。

この他にも刺激材料として使われた絵カードを保存しています。

（情報資料部門 資料整備グループ）



国立国語研究所公開研究発表会

「生活日本語」の学習をめぐって ― 文化・言語の違いを超えるために ―

国立国語研究所 日本語教育基盤情報センターは，「生活のための日本語」，つまり「生活日本語」の学習をめぐる調査研究を進めています。今回の公開研究発表会は，日本語教育基盤情報センターの４つの研究グループが，それぞれ何を目指し，何を明らかにしようとしているのか，これまで何が明らかになってきたのか，ということを提示し，「生活日本語」についての議論を深めていくことを目指します。

日　時：2008年１月26日(土)　14:00～17:00
会　場：国立国語研究所講堂・多目的室（２階）

■プログラム
【挨拶・趣旨説明：14:00～14:10】
【発表：14:10～15:30】
金田智子　生活のための言葉：国内外先行事例から学ぶこと，実態調査から明らかにすること
宇佐美洋　評価の「ゆらぎ」を問い直す：評価観・評価プロセスを探る研究
井上　優　よく分かる日本語辞書とは
野山　広　日本語教育データベースの構築：その課題と可能性について
【コメント・ディスカッション：15:45～17:00】
コメンテータ：才田いずみ（東北大学），西原鈴子（東京女子大学）
司会：柳澤好昭

■参加費・申し込みは不要です。
■問い合わせ先　042-540-4300（代表）
■国立国語研究所ホームページ（http://www.kokken.go.jp/）でもお知らせをしています。

◇交通案内
〒190-8561 東京都立川市緑町10-2
多摩モノレール：「高松駅」下車 徒歩７分
立川バス：立川駅北口２番のりばより，立川バスで「自治大学校・国立国語研究所」下車 徒歩１分
立川駅より徒歩20分



新　刊

『国語年鑑2007年版』
2007年12月／大日本図書／冊子（A5判横組み673ページ），CD-ROM／税込8,085円
『日本語教育年鑑2007年版』
2007年10月／くろしお出版／A5判横組み318ページ／税込4,200円

©2008　国立国語研究所